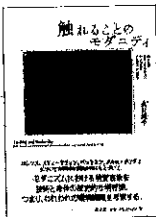


# 「これは比喩ではない」

三原芳秋

高村峰生『触れる』とのモダニティ——ロレンス、ステイグリッツ、ベンヤミン、メルロ＝ポンティ「書評」  
"This is Not a Metaphor"  
A Review of *Touch in D. H. Lawrence, Alfred Stieglitz, Walter Benjamin, and Maurice Merleau-Ponty* by Mineo Takamura  
Toshiko Aikawa



高村峰生『触れる』とのモダニティ——ロレンス、ステイグリッツ、ベンヤミン、メルロ＝ポンティ」以文社、2017年

本書は、翻訳であるという。

「あとがき」によれば、二〇一一年にイリノイ大学大学院比較世界文学科に提出された博士論文(*Touch and Modernity: The Sense of Touch in D. H. Lawrence, Alfred Stieglitz, Walter Benjamin, and Maurice Merleau-Ponty*)を日本語に翻訳したものに「大幅な改稿と増補を施し」たとあるが、インターネット上に公開されている同論文をダウンロードして要所要所を見比べてみたところ、概してかなり忠実な翻訳であるという印象を受けた。本書が北米の比較文学科に提出された博士論文の翻訳であるという事実は、その意義を考えるうえで一定の重要性を持つものと考えられる。あるテーマ(「触覚性」)に沿って複数のテキスト(「文学」に限らざるは、大きな範疇(「近代性」)に目配せをしようえでモノグラフとするのは、北米における文学研究(ことに比較文学)においてある種の定型をなしていると言っても過言ではないだろう。その意味では、フランスのとれた配置(イギリス文学の「古典」、アメリカの写真批評、ベンヤミン、フランス現代思想をもつこの博士論文は、すぐれて「定型的」であるといえる。また、前半の二章は後期ロレンスの旅行記からステイグリッツ・サークルの写真および批評までさまざまなテキストを相手に「触覚的比喩」

は残念であるが。

むしろ「翻訳」が外在的にもたらす効果でもって、本書の真価を語ることはできない。それはひとえに、これら四種四様の精読(「真の意味で(触れ合う)ことに成功しているか否かにかかっている——一枚の切符で地下鉄の乗り換え(transfer = meta-phora)をくりかえし市内を一周して元の駅に戻ってくるようでは、個々の路線のおもしろみはあったとしても全体として生産的であるとはいえず(下手な比喩だと思われた方は、ド・マンのポードレル「万物照応論」をご笑覧あれ)、その「乗り換え」が真に根源的な意義をもつのは、「水平的」な接統のうち(「垂直的」なものに(触れる瞬間)契機が生起する場合のみである、というのが評者の信念である。それは「垂直の次元とのカタストロフィックなふれ合いの経験」(坂部恵)であり、ベンヤミンが「翻訳」と呼んだ実践が志向するところである。

その意味では、「ベンヤミンにおける触覚的批評的射程」を測る第三章が「翻訳の触覚」に着地点を見いだしているのはうれしきことだ。「翻訳」と「翻訳可能性」との「密接な連関」が「生の連関」と名指されることについて、「心身問題の図式」という未完の論文においてベンヤミンが描くダンテのベアトリーチェへの愛(触れることなく触れる)を引き合いに出し「身体的な限界を超えて存在する、不可視の呼応である」(二八四頁)とする議論運びは、実に鮮やかである。続けて、かなり強い主張がなされる——「これは比喩ではない。これを単なる比喩であると捉えようとベンヤミンの議論の生氣論的性質の本質を捉え損ねてしまう。われわれ読者がこのような「連関」を信じるかどうかとは別に、ベンヤミンがそれを信じていたという事を認識しておくことは重要である」(二八五頁)。筆者は、「翻訳の生氣論的な接触」(二八九頁)が比喩

「触覚的イメージ」「触覚的なものへの感性」などを拾い上げつつ比較的オーソドックスな精読を展開し——「オーソドックスな精読」が本書のレールでなされることは昨今稀であり、紙幅の都合上その見事さを詳述することができないのが残念である——後半の二章ではベンヤミンとメルロ＝ポンティという「現代思想北米でいうところの「Theory」」のハードコアに野心的な理論介入を行うというのにも、筆者のすべれたフランス感覚によるものと推察される。

ところが、それがいったん日本語に翻訳されると、情況は一変する。特定作家の「専門家/翻訳家」(「代理店」として縄張り争いに終始しがちな日本の外国文学研究に)としては、この副題のラインナップだけでも戦慄をもたらす潜在力は十分にある。また、同じく「比較文学」といつても、日本では往々にして「日本」をビヴォットとして「比較」する(「定型」とされ、「対」形象化の図式(酒井直樹)によって「日本」を実体化)「特権化するようなナルシズム」(ナシヨナリズムに陥りがちなところ、本書はその陥穽を回避しているともいえる——とはいえず、執筆背景はどうであれ、あくまで日本語の言説空間において「触れる」ということ(を)を思索するのであれば、坂部恵への言及がまったくなくないこと

ではないことを再三繰り返す。ベンヤミンの神学的「歴史唯物論的核」(「偏優の小人」)を重視する評者としては、この「生氣論」一辺倒の強気な議論運びに少なからず違和感を覚えるが、しかしその戦略的意図は理解できる。すなわち、筆者は、「生氣論」の名の下に四者の(触れ合い)の可能性を見いだしているらしいのだ。実際、個々の精読を重視し安易な類似性の指摘を禁欲的に避けている本書において、管見のかぎりただ一度、四つの固有名を並べて明確にその類似性を指摘したのが、「生氣論的なイメージを芸術表現に見出す」(二一九頁)という点においてである。むしろ、「モダニズム」を「生氣論」でもって本質主義的に語るにはある種のクリシェであり、そのフアジズムとの(馴れ合い)も含めて慎重に議論すべきところだが、「序論」に明確に示されているとおり筆者はその点に十分自覚的でありながらあえて、これらの触覚言説の「生氣論的性質の本質」をその歴史性の中に「捉え」ようとする。そのためにも、「触れること」と「生」との連関が、たんなる比喩(「乗り換え」でないことを過剰なまでに強調するのである)。

「翻訳の生氣論的接触の「触れることなく触れる」という性格をめぐる以上の議論は、次章における「触れる働きに存する触れえざるもの」に肉薄する議論へとつながっている。第四章第一節は、本書のなかでもより理論的な部分だが、後期メルロ＝ポンティの「触覚的キアスム」(概念を丁寧に追いつながら「第三項としての「触れえざるもの」へと理論的考察を導く。そのクライマックスを引用しよう……)

アプリオリに触れえざるものなど存在しない。知覚の経験における不可触性という否定的な要素は、触れるという経験と共に生起するのだ。触れられなさは通常「隠蔽され」ていて独立的には浮上

することがないのだが、この破壊不可能で非人称的な要素は個人的な反省意識に先立つばかりか、「他所」ということの起源をなすもの (un originaire de l'Autre) 、「一個の「他者」・「空洞」であるところの Selbst (自己)」としての「生」の基盤を構成するものなのである。(二二二頁)

すいぶん引用符が多い。引用は「見えるもの」と見えざるもの「所収」の「研究ノート」からで、本書では中島盛夫訳(法政大学出版局)を使っているが、評者の手元にある滝浦静雄・木田元訳(みすず書房)から同じ箇所を試しに引いてみよう。「言いかえればどこか別なところ(にある)ということを生み出すもの、他である或る Selbst (自己)、或るくぼみのことである」。前半はまだしも後半は明らかに解釈が割れているが、これは原文が \*un Selbst qui est un Autre, un Creux\* となっていてコママがなくなるとちか確定できないためである。どちらが正しいかの判定は評者のよくするところではないが——ちなみに加國尚志は「沈黙の詩法」(二〇一七)のなかでこの箇所を論じる際「他者である自己」「くぼみである自己」としている——本書の引用文における「他者」「空洞」の引用符は強調であることがわかる。ところで、本書自体が英語の博士論文からの翻訳であるならばともとは英訳から引用してはいたはずだが、そこらへんこうなっている——“an original of the steamer, a Selbst that is an other,” “other” が小文字になっていることは見逃すとしても、それに続く a Hollow\* が切り捨てられていることは意味深長である。しかし、より重要なのは、その後にくく引用符に挟まれる「生」である——ベンヤミン的「翻訳」実践において「触れることなく触れる」対象であるところの「純粹言語」が

して第一章でロレンスのセザンヌ論のうちに見いだした「触覚的な感性」によってしか捉えることの出来ない、非視覚的な生命の根源(七七頁なる本質主義的「二項対立図式」は、たしかに第二章のステューグリッツ・サークルの触覚言説にはよくあてはまっていると言え(二〇)この目に見えない触覚の世界を視覚へと翻訳し、単に見ることしか出来ない者が目を通じて感覚のレベルにまで達することの出来るようにする(二一四三頁)、それをセザンヌつながりでもメルロ＝ポンティはセザンヌの絵画作品を、触覚的経験から視覚的表現への一種の翻訳として描写している。触覚が原初性と結びついているのならば、画家の仕事は原初的接触を視覚的表現へと翻訳することだ(二二二頁)というところにも「翻訳」されること、いくら比喩でもいささか疑念が残る。ことに、著者自身がその直前に「根源的な知覚においては、触覚と視覚との区別は知られてはいない」というメルロ＝ポンティのことばを引いているのを見ると、なおさらである。その同じ箇所引用されるメルロ＝ポンティが「世界がわれわれに触れる」と表現する「根源的受動性」にかかわる事態(「世界の肉」による触れられるもの触れる身体への巻きつき)と、ロレンスたちの「触覚的感性」が「非視覚的な生命の根源」を捉えるという能動的行為とを、同じ「触覚的経験」に「翻訳」することには難がある。「ふれる」という経験は、いまでもなく、触覚に限られるものではなく、むしろより根源的な(人目にふれる)の例からも推察されるように(おそらくは

「生」の基盤をなしていたように、触れることの根源的な不可能性によってのみ根源的に現前する「触れざるもの」が「生」の基盤を構成する、というのは本書に通底する「生気論的接触」概念の要請に適合する命題であり、なるほどと思われ。ところが、引用元にあたってみると、そこに「生」という単語は見当たらない——実際、邦訳の索引によれば、「研究ノート」全体を通して見当たらない——のである。「言いかえれば」の直前にあるのは「真に否定的なもの」「隠蔽態の或る非隠蔽態」(Nichtauspräsentchar) (根源的に現前しえないもの)の或る「Präsentation」(根源的現前)であり、あえてより適切な用語をあてがうとするならば「生」ではなくて「肉」ということになるだろう(余白のメモに \*Upresenheitbarker certa chair\* とある)。つまり、先に引用した理論的クワイマクスにおいて突出する「生」に付された引用符は、メルロ＝ポンティからの引用を意味せず、「空洞」と同じく「筆者による強調」を表しているとするしかない。いわば、仏語の原文が英語訳に(乗り換え)る際、「空洞」を落とした代わりにどこか別なところから「生」を密輸したのが、次の日本語訳への(乗り換え)の際に「空洞」が出てきたせいで「生」の密輸が発覚した、というところか……むろん、これは比喩である。

ところで、この「密輸」の比喩は何を意味するのだろうか。すでに述べたように、本書の筆者は、「視覚/触覚」といった「二項対立」や「生」といった本質主義をあえて脱構築せず、その二項対立や本質主義そのものうちに「歴史的言説としての触覚性」(二〇〇頁)を捉えようとする。あてはめ式の脱構築ゲームを避けることで、個々の精説が生き生きしたものとなっているのは間違いない。しかし、そのように「密輸」として現われたのではないだろうか。

「一般に(靈氣を吹き込まれる)と呼ばれているものは、文字どおり受けとられるべきである。本当に、存在の(吸)気とか呼(吸)気」というものが、つまり存在そのものにおける呼(吸)気があるのだ(「眼と精神」——神秘主義の響きもあるこのくだりを受けて、ティム・インゴルドは「これは比喩ではない」と言いつ切った(「The Atmosphere」)。〈ふれる〉ふれられる(という)根源的経験をめぐる思索は、このインゴルドをはじめ、ゲルノート・ペーメの「霧囲気的美学」やティモシー・モートンの「アンビエント詩学」といった概念に「翻訳」され、人文諸科学のすみずみまで靈氣を吹き込んで……これは比喩ではない。

\*1 評者は以前、この脈絡で、「テクストにふれる／ふれられる」経験を軸に「テクストの存在論」／「生態学的文学理論」を考察したことがある。「三原秀秋『Imitative poets Intake: Rhythmic poets steal』テクストの／における『海賊行』』(『ふれる予備的考察(稲賀繁美編)海賊史観からみた世界史の再構築』所収 思文閣出版二〇一七年)を参照のこと。